南アフリカ問題にゆれるザンビア

●児玉谷史朗

ザンビアは1964年の独立以来，カウンダ大統領のヒューマニズム哲学の指導理念の下，内には比較的穏健な社会主義路線をとり，外交的にはフロントライン諸国の一つとして南部アフリカ解放闘争を支援してきた。経済面では，70年代後半以降，輸出の9割を占める銅価格の低落，石油ショック，3年続きの旱魃による農業不振などの結果，経済不振に陥り，対外債務が累積している。政治的にも，南アフリカによるフロントライン3カ国の首都爆撃，南アフリカの非常事態宣言などをきっかけに，ザンビア内の緊張も高まっている。そこには，二つのジレンマがある。一つは，政治経済路線では必ずしもザンビアが同調しえない世銀・IMFや西側先進国に債務を返済するために，彼らの経済援助に依存し，彼らの経済自由化を中心とする経済改革要求をのまざるを得ないというジレンマ。もう一つは，南アフリカの少数白人政権に対する批判と憤りにもかかわらず，経済・貿易，輸送ルートの面では南アフリカに依存せざるを得ないというジレンマである。

5月19日，南アフリカ軍はボツワナ，ジンバブエ，ザンビア3国の首都を爆撃した。南アフリカの非合法反体制組織ANCを攻撃するというのが南アフリカ側の主張する理由であった。ルサカでは，朝8時半頃ザンビア警察の塗装をした2台の車がルサカ南西部のマケニ難民キャンプに来て発砲し，その直後に2機のジェット機が爆弾を落とした。ナミビア人1名が死亡した他負傷者9名。爆撃の直後カウンダ大統領は緊急記者会見を行ない，目に涙を浮かべながら南アフリカを激しく非難した。同時に，今回の南アフリカの攻撃はアメリカによるリビア爆撃をまねたものだとしてレーガン大統領にも非難をあびせた。

5月23日に，国連安保理の南部アフリカに関する討議の席上，ザンビア代表が同様の理由をあげてアメリカの南部アフリカ政策を非難したのに対し，アメリカ代表はアメリカの政策に従わない国に対する援助を引き上げる可能性を示唆した。同じ日ルサカでは，アメリカが小麦，植物油など物資1000万ドル相当をザンビアに供与する協定が両国間で締結された。翌日の『タイムズ・オブ・ザンビア』紙は，この二つのニュースをともに一面で報道した。カウンダ大統領は6月5日，アメリカ人記者とのインタビューで，アメリカの援助とひきかえに，ザンビアが南部アフリカ解放闘争への支援をやめることはないと強調した。

南アフリカによる爆撃後，ザンビアでは警察や軍による監視，防衛体制が強化され，スパイ容疑で白人が何人も拘留されるという事態が起きている。この間，新聞に報道された主なものだけでも次のようになる。

〔5月21日〕カウンダ大統領はザンビアの白人農場主（複数）がルサカを攻撃した南アフリカの特殊部隊に協力していたと述べ，白人農場主1名を拘留中と発表。

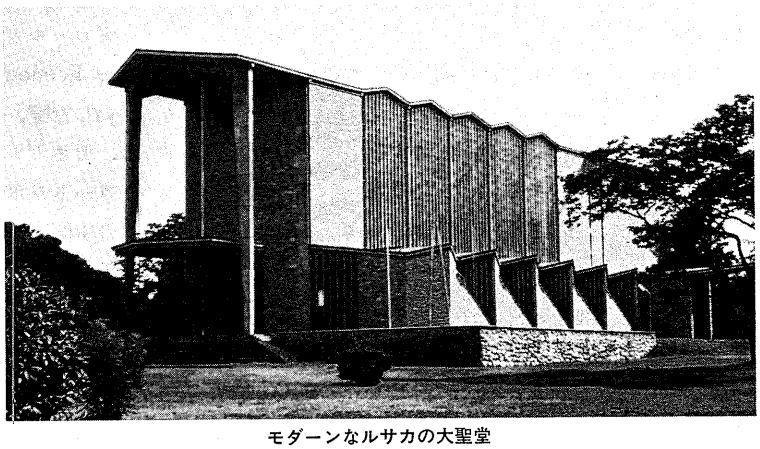
〔6月4日〕コッパーベルトでイギリス人1名を含む2名を拘留。

〔6月5日〕3人の白人が拘留されているとの発表（そのうちの2人は南アフリカ系のコンピューター会社の職員）。

〔6月17日〕3人の白人がルサカで写真撮影をしたとして逮捕。

〔6月18日〕北部州のカサマで2人の白人が南アフリカ軍のものらしき車に乗っていたかどで拘留。

さらに6月30日にカウンダ大統領は，西ドイツが，スパイ容疑で拘留されている2名の西ドイツ人を直ちに釈放しなければザンビアに対する

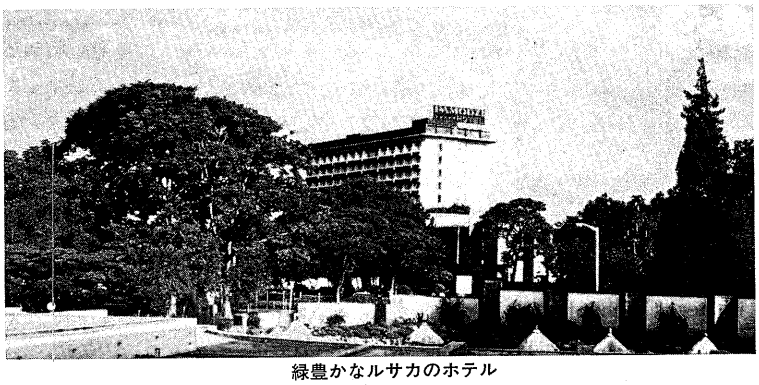


モダーンなルサカの大聖堂

通　　信

経済援助を打ち切ると警告してきたことを明らかにした。カウンダ大統領は，ザンビアは貧しい国ではあるが，独立と誇りを経済援助とひきかえにはしない，として西ドイツを非難した。

新聞に発表されたもの以外にスパイと疑われて短期間拘留された白人は他にもいるようである。先日，筆者が所属するザンビア大学のアフリカ研究所(IAS)に朝，車で出勤したところ，研究所の門の前に近くのムナリ中学校の生徒が多数集まっている。そのなかの数人にたずねると研究所にいる白人の研究者を待っていると言う。そのうち，まわりにいた生徒たちが車をたたいたり，けったりし始めた。同乗していたザンビア人が車から出て説明をしたため生徒たちは車を離れたが，一時は恐しい気がした。研究所に入って何人かの人から聞いた話を総合すると次のようになる。2，3日前に，IASと同じ建物のなかにある農村開発研究所の所長にドイツ人かオランダ人の研究者が面会にきて，所長が不在だったため，研究所の裏手にあるカウンダ・スクエアーというアフリカ人低所得者の居住区（ザンビアではコンパウンドと呼んでいる）に行って写真をとり，自警団か軍につかまった。結局1日くらいで釈放されたらしいのだが，ムナリ中学校の生徒たちは研究所にいる，この「白人スパイ」をつるしあげるためにやってきたというわけである。さらにIASのある職員の説明によれば，生徒たちの間には昨年来の学校の寮費導入以来不満がくすぶっており，何かきっかけがあればこのような形で不満を爆発させるのだという。独立以来教育と医療の無料供与はザンビアの政策の目玉であったが，近年の経済・財政事情悪化とIMF等の財政赤字削減要求でしだいに修正を余儀なくされているのである（この事件の数日後に，ムナリ中学校の生徒たちは有料化された寄宿舎の食事が前よりまずくなったとしてストをし，町中をデモした）。



緑豊かなルサカのホテル

この事件のあった1週間ほど前にIAS主催の研究セミナーが2日間にわたって開催された。セミナーの冒頭のスピーチのなかでモヨ所長は，ザンビアにおける外国人研究者の受入れについて副学長から提起された問題を受けて（ザンビアは外国人の調査・研究者の受入れには非常に好意的かつ寛容である），スパイが研究者をよそおってまぎれこまないように，また逆に一般の研究者がスパイとまちがわれないように十分注意しなければならないと述べていたのであった。上記のドイツ人かオランダ人の研究者は，ザンビアの現在の情勢を考えれば実に軽率・無知としかいいようのない行動をとったわけである。

こうしてザンビアは南アフリカの攻撃後，防衛・公安体制を強化するとともに，南アフリカの非常事態をめぐる情勢のなかで，南アフリカに対する経済制裁を含む強硬な措置を西側先進諸国に働きかけている。しかし，ザンビアは経済面特に貿易と輸送ルートの面では南アフリカに依存せざるをえない。現在ザンビアの輸入の60%近くは南アフリカからあるいは南アフリカ経由によるものであるといわれる。ルサカのスーパーマーケットに並ぶ多くの外国製品のなかでも南アフリカ製品は一番多い。

6月に起こったランドローバー事件はザンビアのおかれている状況を象徴的に示したものといえる。6月8日，南アフリカの白人1人とザンビア人5人が5台のランドローバーと1台のトラックをジンバブエ国境からザンビアに持ちこむところを税関で差し押さえられ，警察の査問を受けた。これらの車がザンビアの軍用車の色に塗装されていたからである。9日付の『タイムズ・オブ・ザンビア』紙は一面トップでこのニュースを伝えた。前に述べたように，5月19日の南アフリカ軍による攻撃の際，ザンビア警察の車を装った車が使われたために，すわ南アフリカの特殊部隊の車かと色めきたったわけである。結局2日後に，これらの車は輸送してきた者の申し立てどおり，ザンビアの電力供給公社(ZESCO)とタンザニアの水利プロジェクトが注文したものであることがわかり通関を許されたのであった。

（こだまや・しろう/在ルサカ　海外派遣員）